

## 単身世帯が首位に

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 大西 浩一郎

「ひとはみな一人では生きてゆけないものだから」。ピンと来られた読者はそれなりにおられると思います。中村雅俊さんのヒット曲「ふれあい」の一節です。ある日の新聞の朝刊を読んで以来、子どものころ再放送で観ていた青春ドラマのこの歌が、筆者の頭の中をグルグル回っています。人間やっぱり「ぬくもりが欲しい」よな、と。

記事の見出しは「2人世帯より単身多く 家族像変化、映さぬ制度」。厚生労働省の「平成6年（2024年）国民生活基礎調査」によると、全世帯に占める世帯人員別構成比では、単身世帯の34.6%が最大であるとのこと。単身世帯が従来首位だった2人世帯を追い越したのは2022年で、そこからは2位以下、とりわけ3人以上の世帯を突き放す勢いとなっています（図表）。筆者の家は夫婦と社会人の子ども2人の4人世帯でしたが、ここ1年のうちに子どもがそれぞれ独立しましたし、両方の実家もあつという間に一人親になりましたので、筆者の納得感は人一倍強いのかも知れません。

高齢者の一人暮らしが増えているという話は頻りに聞いてきました。一方、子どものひとり立ちについては今も昔も変わらないと思いますが、それが長期化しているというのが今起こっていることで、以前に比べて、結婚などで2人以上の世帯に組み変わるケースが減っているのでしょう。この統計には地域ブロック別のデータがあり、全国ではまだ2人世帯が首位だった2021年、単身世帯が首位であったのは大阪・京都・兵庫で構成される「近

畿1」ブロックだけでした。ところが、最新の2024年になると、「北海道」「四国」などの地方圏と、わが埼玉と、東京・千葉・神奈川からなる「関東1」、東海、「近畿1」など都市圏の両方で単身世帯が首位となっています。

都市か地方かに関係なく単身世帯が首位に立ち、これからも2人世帯との差を広げるであろうことは不可逆的な事象であり、社会のうねりというべきものです。ところでこれは、特にB to Cの分野では、ビジネス・チャンスの到来と捉えることができます。例えば、「御一人様」が入りやすい飲食店や、食品スーパーの小分けした野菜セット、パンなど、新しいビジネスのアイデアが次々と生まれ、逞しく拡大しています。一人暮らしの高齢者を念頭に置いた、きめ細かな福祉サービスや遠隔地からの見守りのためのITサービスなども、日進月歩で充実していています。

また、先行き若い世代でも高齢者でも単身世帯が累増することを考えた場合、コロナ禍のもとで問題となった「孤独」・「疎外感」が、社会として向き合わなければならない課題としてより一層重みを増してくるのではないのでしょうか。こうした中、筆者は同年代による「コミュニティ」や「サークル」の組成・運営といったことも、ビジネスの切り口として一考の価値があるのではないかと考えています。もっと緩やかな「集い」でもいいでしょう。そんな新しいビジネスの登場に期待しています。なぜなら、「ひとはみな一人では生きてゆけないものだから」。

図表：世帯人員別の構成比の推移

